

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 58 号

平成 19 年 2 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

神谷美恵子著作集 第 2 巻「人間を見つめて」(4)

死について

「いつ死ぬかわからない」という思いにつきまとわれていれば毎日の生命をたいせつに生きる心も自然に湧いてくる。他人の生命も一層たいせつに思えてくる。この広大な宇宙の中で、たまたま、時と所を同じうして生れあわせたことの「縁」は並々ならぬものだ、と思えてくる。その人たちと力をあわせて、あとから来る人たちのために、少しでも美しい世を残したいという気持も起こってくるのではないだろうか。いったん死を覚悟すれば、ものの価値判断も変わってくる。なるべく価値あることに自分の生命を使いたいという気持だけは、たしかに出てくる。つまらないことをしている暇はないことに気づくからだ。こう考えたときはじめて、死というものは生にとってプラスの意味を帯びてくる。

私たちのいのちを支えるものは私たちの死後をも支えるはずと思えたとき、何も恐れや不安を抱く必要のないことがわかる。しかし、死に近づくに従って、人情でも自然でも、何と美しくなつかしく見えてくることか。それは人間としてごく自然な惜別の情でもあろう。ちょうど日が沈む前のひととき、斜めの陽をうけて、ものの影が濃くなり、色や形がくっきり浮かびあがって、この世ならぬ美しさをおびるのに似ている。

自我というもの

宗教には自力宗と他力宗というのがあるが、これもこの見地から見れば、そうはっきり区別できないものようになってくる。もちろん人間は意識的に、自分の力で自分を統制して、できるだけ自己にとって有益無害な生活をおくるべく努力すべきであろう。...

しかし、自力による修養や瞑想によってもどうしてもない自己というものが、人間の奥底にはひそんでいる。利己的で、わがままで、でたらめの原始的な自己は、おそらく「古い脳」のなせるわざであろう。もしそうした自己を直視するならば、それをありのままみとめ、これが宗教でいう「ざんげ」とか「告解」とかいうものではなからうか。最終的には「人間を越えるもの」に身をゆだねるほかないのではなからうか。

...自力といっても、自分ひとりの力であるはずはなく、自分では意識しないたくさんの内外の条件がそなわって初めて成就することなのだから、結局は大きな意味でやはり他力というべきではなからうか。

要するに自己とか自我とかいっても、そもそも自分からこの世に生まれてきたわけでもなく、いわば「存在させられたもの」にすぎない。それはちょうど、花やけものや天体とまったく同じように「存在させられている」にすぎないのだから、窮極的には「存在させたもの」の前に、草木や星のように、素直に存在するほかはないと思う。

小我と大我ということを仏教のほうでいうが、この小我とは自ら意識する自我で、結局は自我の一部にすぎないのだろう。これに反し、大我とは、万物を「存在させたもの」の手に小我をゆだねるとき、初めて自己の全体像として、真実の「本来的自己」としてあらわれるものだと思う。...私たちは特定の宗教にとらわれずに自由に思索していきたい。人類の宗教的遺産を広く踏まえたくて、宗教的思惟もまた歴史と共に進歩していくものではなからうか。

人間を越えるもの（１）

慈悲となさけとわわらぎと愛とに、
あらゆる者は苦しいとき祈り、
これらの喜ばしい徳に
感謝の心をささげる。

.....

慈悲は人の心にやどり
なさけは人の顔にあらわれ
愛はこうごうしい人の姿、
和らぎは人のまとう着物。
あらゆる国のあらゆる人の
苦しい時に祈る神は
こうごうしい人の姿をもたぬか、
愛と慈悲となさけと和らぎの。
人の姿を愛せねばならぬ、
異教びと トルコびと ユダヤ人も、
慈悲と愛となさけのすむところ、
そこに神おわします故。

右は英国のブレイクの詩である。至高者を思い浮かべるとき、人間が普遍的に抱く心をあらわしたものである。こうした普遍的宗教心を大切にしたい。

人間を越えるもの(2)

17世紀にパスカルが直観したように、人間は無限小と無限大の両世界の「二つの無限」の間に挟まれた存在である、という点では今なお変わらない、といえる。天台や華嚴の經典にも、すでにこうした考えがはっきり述べられているのはじつに興味深い。

めくるめく二つの無限にはさまれた人間は、ふしぎなところというものを持つに至り、そのところはそれ自体の感情と欲求を持つ。...人間のところは「慈悲となさけと和らぎと愛」にあこがれてやまない。それで昔から、そういう特質をそなえた超越的な存在を、宇宙の背後に想定してきた。よく知られているように、この存在を単数と考える宗教と複数と考える宗教とがある。ギリシャ人たちは「神々」を考えたほうで、大ローマ帝国の皇帝であったマルクス・アウレリウスでさえ、ギリシャ的教養にしたがってこの神々を次のような善意あるものと考え、まれにみる敬虔な賢帝としての一生を送った。...

そこへ行くと、ユダヤ教、キリスト教、回教などでは唯一神が信じられているが、それだけにこれらの神は互に排他的となる。歴史学者トインビーは世界の諸宗教とその歴史に深く通じており、諸「高等宗教」は融合されるべきであると考えているから、「神」という言葉を使わずに、「宇宙の背後にある精神的存在」という表現をとる。しかし「精神的」と言ってみたところで、しょせん人間のあたまで想像する形容詞にすぎないから、ほんとうはどんなものかわからないであろう。仏教はもっと超越的で非人間的で、例えば華嚴にみる壮大な宇宙の構想など、かえって現在の自然科学的宇宙観と両立しやすいが、それでもなお仏とか如来とか菩薩など、擬人化した存在を想定せずにはいられなかった。けっきょく、人間の小さなあたまで、たとえ超越的な存在を考えたときにも、人間的に考えるほかはないのであろう。また慈悲とか愛とかいうときも、人間の心のあこがれるものを、人間的な属性で表現しているにすぎないのだと思う。

愛の自覚

(療養所で出会ったある心因性のうつ状態の患者の例として)

そのうちにその人は、人にさそわれてある宗教の集会に行くようになったと、と手紙に記されてきた。...数ヶ月してからの手紙。

私は不幸だ、とばかり思って自分にとじこもっていました。でもこの頃、集会でお話を聞くようになり、お話はむつかしくてよくわからないのですけれど、私はほんとうに愛されているのだ、ということを知るようになったのです。それで心が明るくなり、おちついて、いろいろな方の恩や神様の愛を感じるようになりました。夜、気味の悪いものがみえたりすることはもうありません。先生、どうぞ安心してください。

要するに、このひとには、人間を越えているものに「愛されている」という自覚で十分であったのだ。むつかしい教義は何もわからない、という。それでいいのだ。...

こうした例を私はいくつかみてきた。その結果、私は思うようになった。人間というものは、人間を越えたものが自分と世界とを支えている、という根本的な信頼感が無意識のうちになければ、一日も安心して行きて行けるはずはなく、真のよろこび、真の愛も知り得ないものなのだ、と。...

しかし、まぎれもないことは、人間がみな「愛へのかわき」をもっていることである。その大いなる実体がわからないにせよ、人間を越えたものの絶対的な愛を信じることが、このかわきをみたすのに十分であることを、昔から古今東西の多くの偉大な人や無名な人々が証明してきた。このかわきがみたされてこそ、初めて人間の心はいのちにみたされ、それが外にもあふれ出すにはいない。このことをある人は歌った。題して「うつわの歌」という。

うつわの歌

私はうつわ
愛をうけるための。
うつわはまるで腐れ木だ、
いつこわれるか わからない。

でも愛はいのちの水
大いなる泉のものだから。
あとからあとから湧き出でて
つきることもない。

愛は降りつづける
時には春雨のように
時には夕立のように
どの日にもやむことはない

.....

うつわはじきに溢れてしまう
そしてまわりにこぼれて行く
こぼれてどこに行くのだろう。
そんなこと、私は知らない。

私はうつわ
愛をうけるための。
私はただのうつわ、
いつもうけるだけ。

これを歌った人は、人の忌み嫌う病を患い、一般社会から阻害されてもいた。それでもなお、この人には、いきいきしたものがあふれていた。私はそれをこの眼でみたから、うたがうことはできない。

(注 この詩の作者は神谷美恵子。昭和10～12年彼女は結核をわずらって療養した。)

おわりに

人は生きがいを「何かをすること」に求めて探しまわる。しかし何かをする以前に、まず人間としての生を感謝とよろこびのうちに謙虚にうけとめる「存在のしかた」、つまり「ありがた」がたいせつに思える。それは何も力んで、修養して自分のものにする性質のものでなく、前章にのべた「愛の自覚」から自然に流れ出るものであると思う。まずこの泉を掘りあてれば、私たちは「何かすること」がなくても、何もすることができないような病の床にあっても、感謝して安らうことができる。死に直面しても、死は苦しみにみちた人生から大きな世界への解放として展望することができる。もし銀河系の中に、天体のあいだに、自由に飛翔しうる存在となれるならば、それはすばらしく雄大なことではなからうか。

こうした大きな視野に立ち、大いなるものを信賴して、卑小な自分をまもることや、自分が所有するつもりになっているもろもろの物や力をまもることに、それほど熱中しなくなれば、どんなに多くのエネルギーが解き放たれることであろう。どんなに勇気が湧いてきて、冒険にもり出すことができるであろう。そのために自分の小さな生きがいをも捨てる覚悟ができてこそ、かえって真の生きるよろこびが与えられうる、という逆説も成立つのではなからうか。そうすれば「何かすること」を探しまわる必要はない。なすべきことのほうから、こちらに押しよせてきて、応接いとまなし、ということになるだろう。「使命のほうがわれわれを探している」というハマーショルドの言葉はあくまで正しい。...

生命への畏敬と言うことをシュバイツァは言ったが、私は宇宙への畏敬の念に、このごろ、ひとしおみたされている。科学の武器をもってさえ、その全貌を把握できないこの宇宙の中で、私たちは「意識」ある生命を与えられた。この意識をもって宇宙を支えるものに賛歌をささげたい。それをささげうる心が人間に与えられたことを感謝したい。こういう広大な世界を、小さな心で思い浮かべうることこそ人間に与えられたおどろくべき特権であると思う。

「ハリール・ジブラーンの詩」より（２）

おお地球よ

神谷美恵子訳

なんと美しく尊いものであることか、地球よ。
光に全き忠誠をささげ、
けだかくも太陽に服従しつくすあなたよ。
なんと愛らしきものであることか、地球よ。
もやのヴェールをまとう姿も、
闇につつまれたかんばせも。

曙の歌のなんというやさしさ、
夕（ゆうべ）の讃歌のなんという烈（はげ）しさ。
地球よ、十全にして堂々たるものよ。

私は野と山と谷と洞窟を歩いて見出した、
野にはあなたの夢、山には誇りを、
谷にはあなたの静謐（せいひつ）、岩には決断を、
洞窟にはあなたの秘密がひそんでいるのを。

私は海と川とせせらぎを渡って耳をすまし、
潮のさしひきに永遠のことばを聞き、
山々のはざまに世々の歌がこだまし合うのを聞き、
峠と山道には生命へのよび声を聞いた。

なんと寛容なものであることか、地球よ。
私たちはあなたから元素をひきぬき、
大砲や爆弾をつくるのに、あなたは
私たちの元素から百合やばらの花を育てる。

なんと忍耐づよく慈悲ぶかいことか、地球よ。

あなたは神が宇宙の東から西へ旅したもうたときに、
み足のもとに舞い上がった塵（ちり）の一粒でもあろうか。
または「永遠」のかまどから放射された火花なのか。
それとも大空の野に蒔（ま）かれた種で伸びて神の樹となり、
天の上にまで届く高い枝を伸ばしているのか。
あるいはまた時の神が空間の神のたなごころの上に
のせたもうた一個の宝石でもあろうか。
地球よ、あなたはだれ、そしてなに。
あなたは「私」なのだ、地球よ！

あなたは私の見るものと私の識（し）るもの。
あなたは私の知と私の夢。
あなたは私の飢えと私の渇き。
あなたは私の悲しみと私のよろこび。
あなたは私の放心と私の覚醒。
あなたは私の眼（まなこ）に生きる美であり、
心にあふれるあこがれであり、
私の魂の内なる永遠の生命である。

あなたは「私」なのだ、地球よ。
私が存在しなかったらば、
あなたは存在しなかったろう。

（神谷美恵子先生の説明）

これはアラビア語からの重訳です。しかも全体の半分位に過ぎません。恐らく、ごく若いころ書かれたものと考えられますが、ジブラーンの宗教的な自然観と審美観、そして宇宙的ともいえる壮大な視野が、すでによく現れているではありませんか。日常生活の卑近なものから、時には想像の翼をはためかせて、思い切り広く、遠く、地球のおかれている宇宙に遊び、地球に与えられている自然の恵みを思いみるのを助けてくれるのがジブラーンの詩です。